

パネルディスカッション

進行役 鵜飼教授



若者が地域社会と共に作るパートナーになるためにはどうしたら良いか、地域の光としての若者が生きる土壌を作るために私たちは何をすれば良いのかをお三方とお話をしたいと思います。

----- ご登壇者のみなさま -----



一般社団法人蜜柑の木
永峰さま



ぼくらのアカデミー
綿谷さま



特定非営利活動法人
こどもソーシャルワークセンター
幸重さま



特定非営利活動法人
こどもソーシャルワークセンター
幸重さま

居場所づくりのむずかしさって 実際どういった部分か？

みなさんのお話をきき、「居場所」という話が共通であった。入り口は居場所的などころで、若者が集まってくる→地域との繋がりができてくるのかなと思っていますが、居場所づくりのむずかしさって実際どんなところなんですかね・・・。

そもそも居場所に「来る」こと自体が子どもにとっては大きなハードルだということ。そして、親は来てほしいと思っても、本人が望んでいないケースもあり、その間に立ってアプローチすることにも時間を取られます。子どもたちはそれぞれ困難を抱えていて、背景がすべて違う。私ひとりでは対応しきれないことも多く、中には通報が必要なレベルの子が突然来ることもある。そうした時の知識の必要性や判断の難しさがあります。



一般社団法人蜜柑の木
永峰さま

私たちの活動は、「居場所」よりも「遊び場」と呼べるものだと思います。

「居場所」となると来るハードルが高くなり、あるNPOの方が「支援の匂いがする場所には子どもは寄り付かない」と話していたように、善意や支援の意図すら子どもとの距離感を生む難しさがあります。私たちの場所には支援の匂いは全くなく、ただ遊びに来てお菓子を食べながらゲームをする場くらいにとらえてもらっています。そんな中でも、最後まで残って私と話したり帰りたくないと言う子の話を聞くと、親が夜10時まで帰らず、その間弟の面倒を見なければならぬ子もいます。逆に、趣味をもっと深めたいという子もいて、探求的な学習や習い事につなげることもできますし、支援が必要な子ともつながることができます。私たちの「居場所」は、そうした子どもたちの間に立つクッションのような役割を果たしているのだと思います。



ぼくらのアカデミー
綿谷さま



進行役 鵜飼教授

ご自身の活動で

本質的に、根本的に必要なことはなんですか？

私たちが目指しているのは、「居場所」がなくても子どもたちが元気に過ごせる社会です。しかし現状は難しく、特に困難を抱えた子どもたちが来る場として運営していますが、活動を続けながら、「いつか団体がなくても子どもたちが元気でいられるにはどうすればいいか」も考えています。子どもたちの状況はさまざまに対応が難しく、ある程度の専門性が必要ですが、それだけでなく、自然に寄り添う地域の力も重要です。ざっくり言えば、「人材」が最大の課題です。



一般社団法人蜜柑の木
永峰さま

自身の活動を通して感じるのは、「居場所」というものは、もともと昔「用意」されていたものではなく、アニメ『ドラえもん』の空き地のように、子どもたちが自然と集まって、時には危ないこともしながら自由に遊べる空間がありました。当時は子どもの数が多く、大人の目が行き届かない分、「子どもは失敗するもの」「悪いこともするもの」といった、子どもに対する大らかな受容があったように思います。しかし、今は子どもの数が減り、大人の目が過剰に届くことで、子どもたちが息苦しさをを感じる状況が生まれているように思います。僕の中で今必要なのは小さい単位でいうと「大らかに見守る地域の空気」なんじゃないかと思っています。ただ、待っているだけでは生まれないと考えてますので、まずは地域の大人たちに子どもと関わる場に「来てもらう」こと、つまり仕掛けをつくるのが必要だと思います。



ぼくらのアカデミー
綿谷さま

支援にはオーダーメイド対応が必要で、やはり「お金」が必要です。「健康しが」の補助もそうですが、しんどい子は多いのに、現場の職員給与はボランティア並みになりがちです。若手ソーシャルワーカーが年齢の近い子どもを支援しなければならない難しさもあります。今回の補助で、50代のベテラン職員をユースワーカーとして配置できたのは大きな一歩でした。また、福祉の枠から外れて夜間中学に通い始めると通学定期代が出なくなるなど、新たな課題も出てきます。行政対応には時間がかかり、その間を支えるのが民間の役割です。行政補助や寄付、事業収益など、資金の形は問わず、団体同士が連携してお金を回して支えていけば地域の支援体制もより強くつながっていくと感じています。



特定非営利活動法人
こどもソーシャルワークセンター
幸重さま